

阿貴良一

家のない子の心になって



家のない子の心になって

——亡き伊藤貴磨

酒井朝彦両先生に捧ぐ

阿貴良一



阿 貴 良 一
あ き りょう いち

本名江口 章。1911年、岡山県生
まれ、父の勤務地の大阪で育った。

身体障害のためほとんど正規の学歴はない。青年の頃画家を志し、
新聞社の漫画欄の執筆に加わり近藤日出造・矢崎茂四・富田英三氏
らと識った。また雑誌の挿画も描いた。33年大阪童話教育研究会の
創立に参加、児童文学の創作に転じ、大阪中央放送局の足立勤氏の
知遇を得て、台本執筆や放送の仕事を担当。児童劇団ドオケギの設
立に加わり美術・文芸部員、のち劇団の代表者となった。また創作
グループ新児童文学集団（石橋・花岡・江上・下畑・岡本氏ら）に
参加。39年上京、その夏兄宅に移り、以後居住地が鎌倉となった。
42—49年の間増進堂東京編集部長として児童図書を企画。その頃の
主著作は童話集『東京の匂い』（鶴書房）『春のきたいえ』（増進
堂）など。49年から約10年間主に児童劇作を行ない、劇作品300篇
余、日本児童劇作家協会の事務局長もした。現在、日本児童文学者
協会・日本児童文芸家協会・日本児童演劇協会々員。文学誌『文学
園』・『現代少年文学』同人。絵画グループ日の会々員。<現住所
・鎌倉市坂の下星の井 307 〒248、電話0467—22—6178>

家のない子の心になって

一九七〇年二月十日印刷
一九七〇年二月十五日発行

著 者 阿 貴 良 一
発 行 現代少年文学作家集団

東京都杉並区浜田山三丁
目二六—三

（電話）〇三—三一—
六〇七七

印刷・製本

帝都印刷製本株式会社

東京都板橋区熊野町三四

（電話）〇三—九五六—

一九八八

定価 五〇〇円

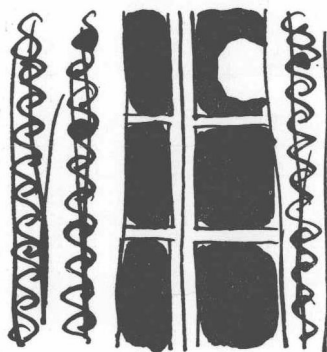
少年小説・家のない子の心になって

もくじ

家のない子	5
黒部にて	18
二つの教材費	32
お誕生パーティー	48
訪れた女	65
少女像A・B	80
崖下の男	96
三つの宝	112

タミ子の手紙……………	134
金賞・銀賞……………	148
谷間のユリ……………	166
十万円の煙……………	187
春告げ鳥……………	203
野の花……………	224
宝去軒……………	243
茅が崎の夏……………	259
あとがき……………	

家のない子



学校の作文の時間に、『わたしの家』という題が出されたとき、中平タミ子はあたえられた作文用紙にこう書いた。

「……わたくしには、家がありません。わたくしのおかあさんも、二どめのおとうさんも、いまはいないからです。わたくしのほんとうのおとうさんは、小学二年のとき病気で死にました。三年生のとき、おかあさんはべつの男の人のおよめさんになりました。わたくしはその人をおとうさんと呼びました。よぶことになったのですが、お酒のみでらばうもののこんどのおとうさんは、好きではありませんでした。」

工事場ではたらくこんどのおとうさんのしごと場がかわるたびに、しず岡・ぎふ・山がたとうつりすんで、いつも親子三人ははんば（飯場）ぐらしのため、三年生からは、学校に行かないときもずいぶんありました。

とやまけんのくろべ（黒部）にいたとき、五年生の夏休みのまえ、わたくしのおとうさんとおかあさんは、わたくしを置いて、どこかへ行ってしまったのです。くろべでははんばの食事をつくるしごとをしていたおとうさんが、ある晩、人とけんかして、その人けがをさせ、お金までぬすんで、にげて行きました。

おまわりさんが、しらべに来ました。わたくしはおそろしかったが、きらいなおとうさんなので、いなくなってもかなしくはありませんでした。すると、それから一週間して、こんどは、おかあさんがどこかへ行ってしまったのです。おかあさんは、おとうさんがけがをさせた若い男の人と、いっしょににげたのです。

わたくしをひとり置いて、いなくなつたのですから、おかあさんはわたくしをすてたのでしょう。それからは、わたくしの家はなくなりました。いつか読んだどうわのだいに、『家なき子』というのがありました。わたくしも家のない子です。』

この作文を読んだ担任の先生からばくの母に、一度学校に来てほしいとの呼び出しがあった。そ

の日、学校へ出かけた母は、夕方おそくあたりが暗くなりかけたころ、戻って来た。

へやの隅で、タミ子は寝ころんだまま、月刊雑誌を読んでいた。ぼくは机に向かって復習をしていたが、母がタミ子のことと学校に呼び出されたのが気にかかり、ろくすっぽ勉強も手につかないでいた。帰って来た母に、そつとたずねると、『わたしの家』というあのタミ子の作文を見せてくれた。

母とぼくが、こっそり話し合っているのを、タミ子は気にもとめないようであった。

タミ子の身の上については、母もぼくもよく知っていた。知ったうえで、困っているタミ子を引きとって預かっているのだが、タミ子の秘密はぼくたちだけのないしよにして、だれにも知らせないほうがよいと考えていたのだった。

「困ってしまつたわ。親類の子を預かっているってことにしておいたでしょう。タミ子ちゃんの正直はいいんだけど、先生にほんとうはこうなんですよと、改めていいにくかつたわ。」

母は、タミ子の方を見ながら、半分つぶやくようにいった。

「でも、先生はわかつてくださったの。……これは先生だけのことにします、学校でのことは引き受けましたって。」

そういったあと、母は気をかえたように立ち上がった。

「タミ子ちゃん、おなががすいたでしょう。すぐ支度するわね。」

そのままエプロンに手を通すと、お勝手にはいつていったが、「あら、どうしたの、お八つはそのままじゃないの。」という母の声が聞こえた。

ぼくは、タミ子にお八つをやることを忘れていた。

どこかで鳴らすテレビのテーマ・ソングが聞こえている。

タミ子がぼくの家を引きとられたのは、この八月のことであつた。五年生のぼくと、同じ学年の生徒として転校の手続きをとったのだが、そのときぼくはずいぶん悩んだものだ。

タミ子のそれまでの生活は、ぼくたちの生活とはひどく違つていたはずで、それが姿や心にも現われていた。新しくはいつて来た転校生を見る目は、だれに限らず好奇心にみちたもので、そのはね返りを、タミ子に代わつて、ぼくが当然受けとめねばならぬはめとなつた。

「へえ、きみの親類の女の子だつていうのだろう。もつとしゃきつとしてるのかと思つたよ。ところがだ、あれ、なんていうのかな。」

ある日、校門を出て行くタミ子のうしろ姿を見つめていた友だちが、わざわざぼくを追つて来て話しかけた。すると、べつの友だちが横から口をはさんだ。

「トウモロコシつていうのだよ、あれ。外をおおっている皮がざらざらしていて、それにぱさつと赤い毛がたれてるだろう……。」

タミ子の艶つやのわるい、赤茶けた髪の毛のことをいつてゐるのだ。

「ああ、その感じだな。それにあの話し方……。」

「いなかっぺい、というのだよ。」

そのまま聞いていると、もっとひどいことをいうだろう。ぼくは、耳をおおいた気持ちで友だちから離れ、大急ぎで駆け戻ったあの日のことが思い出された。

たしかにぼく自身も、はじめはタミ子に、みんなと同じような感じをもっていた。

転校して来たタミ子が、二組みのほうに回り、同じクラスでないことに、ほんと安心したのはぼくだった。そして、同じ家について、同じ学校に通いながら、いっしょに行くのをわざと避けている、それもぼくなのだ。

家にいるときは、けっこう親しくしながら、学校にいるときのタミ子には、友だちの目を気にして遠くに離れている。そんな二重人格的な自分の気持ちだが、解決されないでいるとき、学校へ母が呼び出されたのが、あのタミ子の作文であった。池に投げ込まれた小石のように、その波紋はぼくの頭の中で広がっていった。

夕食を待つま、タミ子はぼくたちから離れたかつこうで、テーブルの上で教科書をひろげている。ぼくは、また作文のことを考えつつづけていた。

——タミ子は正直なのだ。正しくものを見て、正しく語る、それが正しさに通じる。ぼくはそれを見落としているのではないだろうか、と。

三人が夕食のテーブルに向かったのは、七時を回っていた。

ばくの父は、黒部の電源開発の工事場の技師をしていた。この二年ほどは、現場勤めのまま、年に二、三度家に帰って来るだけで、このところは母とばくのふたり暮らしだし、タミ子を加えても、三人きりの寂しい食事だった。食べ物も、ばくやタミ子の口に合うようにつくられていた。いつもばくが好んで食べる魚のフライが、皿の上ののっていたが、空腹のはずなのに、今夜はそれほど食欲が起こらなかった。

ガラス窓のカーテンのあいだから、月が差し込んでいた。十月を迎えると月の光にも急に秋が深まったという感じがして、その影を青く淡く映していた。

食べはじめてからしばらくたって、タミ子が箸を置いた。

「おばさん、すみません。わたしは悪いことをしました。」

そういつて急に泣きだしてしまった。

ばくはすぐ、母の学校行きのこと、そして、あの作文のことだと気がついた。

「どうしたの、お食事ちゅうに……びっくりするじゃないの。」

母は、わざとおどけたような声を出したが、タミ子は顔に手を当てて泣きじゃくっている。

ばくも食事の箸を置いた。タミ子の隣にすわっている母は、肩を抱くようにして、ハンカチで涙をぬぐってやっていた。

「おばさんがね、きょう学校へ行ったのはね、タミ子ちゃんのことよ。でも、気にするようなことじゃないの、ね。」

「いいえ、わたしが作文にあんなことを書いて、それで……。わたし、あの作文の題を見たとき、どうしようかと思ったのです。でも、書かずにはいらなかったのです。わたしの胸の中に、いっぱいたまっていたことなのです。」

タミ子の目からは、ぬぐってやるあとから、涙が吹き出していた。

「いいんだよ、かあさん。……タミ子がね、あの作文を書いたことは正しいんだよ。」

さっきまで、ぼくの胸の中でもややもやしていたものが、急に声になった。

「ぼくたちが、おていさいばかり考えているのがいけないんだよ。タミ子のことを思ってるみたいで、自分のつごうを考えているのだよ。かあさんは、そう思わない……。ぼくも、ほんとうは、タミ子のことをたいせつに考えていなかったのかもしれない。」

ぼくの思っていることを、そのまま話してしまった。そして、話しているうちに、自分の心の中にたまっていたオリのようなものが、きれいに洗い清められてゆくような気がした。

「タケシのいうとおり、これからは、もっとタミ子ちゃんのことを考えてあげましょうね。タミ子ちゃんを親類の子だということより、ほんとうに愛してあげられるか、どうか、……。そかわね。」
母もなにかを感じているのだろう、タミ子を抱きかかえている指先が、細かくふるえていた。

食後、母はリンゴをむいてくれた。さっきの話し合いで心が通じ合ったはずなのに、なにかまだ妙に解け合わないものが残っていた。それは、ことばだけで終わるものではなく、これからの生活のなかで、解決しなければいけないのだろう。

タミ子はさっぱりしたような顔で、皿のリンゴをほおぼっていた。電灯の光のはずれにいるタミ子の横顔に、月の光がガラス戸越しに写っている。

タミ子がほんとうのことを書きたかったという、あの作文の『わたしの家』の一節が、また思い出された。童話の本で読んだ『家なき子』よりも、もっとなまなましく感じられたのは、自分を家のない子と案じているタミ子が、現実にも目の前にいるためだろうか。

ぼくたちの家に、いっしょに住んでいるあいだけでも、タミ子を『家ある子』にしてやらなければいけないと、ぼくはリンゴを食べながら考えていた。

母は、テーブルのそばの雑誌を手にしてしたが、ふと写真のページを指さした。それは色刷りで、美しい服に身を包んだ少女の写真であった。

「かわいいわね。」

といって、タミ子の方に指し示した。

新しい子ども服のスタイル写真なのだろう。

「タミ子ちゃんは、こんな洋服は欲しくない。」

「いいえ。」

タミ子には興味がないらしかった。

「あら、そうそう、さっきのことで忘れてたわ。」

母は立つて行くと、買い物の紙包みを持って戻って来た。

「これよ。」

母は、もどかしそうに紙包みをはどいた。ピンク色のナイロンのスーツケースが出てきた。

「もうすぐ修学旅行でしょう。タミ子ちゃんにと思って、買ってきたのだけど。」

タミ子は、ちよつと目をやったが、手に取ろうとはしなかった。

「うちには女の子がいないので、どんなのがいいのかわからないのよ。でも、これ、かわいいと思つて。」

母はタミ子の方へ押しやったが、まるでそれをよけるように、からだを固くしている。そして、

「わたし、遠足へは行きません。……いいんです、お金ありませんし。」

といった。

あんな話のあとで、母が買ってくれたものに、すなおに手が出ないのかと思っていたが、タミ子はべつのことを気にしているのだった。

「だいじょうぶだよ、……お金のことなんか。」

と、ぼくがいうと、そのことばに母がつけ足した。

「そうよ。タケシといっしょですもの、タミ子ちゃんも、分けへだてて考えてはいけないわ。」

この秋の修学旅行は、千葉県の鋸山のこぎりに出かけることになっていた。

「一組みでもみんなが行くんだよ。ふたりほど行けないという生徒がいたけれど、その生徒だって、学校からお金が出て、行くことに決まったんだもの。」

ぼくは、たとえのつもりでその話を持ち出したが、すぐへんなことをいいたのに気がついた。お金のことや、自分の境遇のことを、いちばん気にしているタミ子が、このことばをどう受けとったろうか。

ピンクのスーツケースは、電灯の光に明るく輝いている。タミ子は、やはりだまったまま身を固くしていた。

ぼくは、なんだか気づまりのようで、テーブルを離れると、自分の勉強べやに引きあげた。

しばらくして、うしろのフスマがあいた。タミ子だった。近よって来ると、

「タケシさん、わたしお願いがあるんです。」

妙に改まった声で、机のスタンドの灯りに、顔を突き出すようにしていった。

「ぼくにできることかい。」

と、たずねると、タミ子はすこしはにかんだような顔をした。